

## 「おいとばあさん」の店

三浦 フミエ（柴北・旧姓 足立）

私が長谷尋常高等小学校に入学したのは大正八年五月です。入学目前の春に病気になり一カ月遅れの入学となり、一人淋しい思いをしたのが忘れられません。学び舎は東西に長く南向きで、長方形の立派な切石が土台石として敷き詰められて一段と高くなり、その上が木造瓦ぶき平屋の建物です。中央右側が校長室、左側が職員室でその左右が教室となっていました。その中でたゞ一カ所二階の部分がありました、そこは畳敷の裁縫室となっていました。校庭は今のようによく東側に桃の木が植えてあり、高い廻せん塔が立っていてよく遊んだ事を思い出します。南側には大きな柳の木と青桐があり、西側は石垣があつて村役場と民家が少しあつて、学校の入口に「おいとばあさん」の店があり生徒は学用品を買っていました。

当時の服装の事を考えてみますと、男の先生は黒のつめえり服、女の先生は着物に袴、そして生徒はほとんど木綿の着物にワラ草履で、雨の日は下駄をはいての登校です。高等科になつて袴をはくようになりました。

勉強の方を少しふりかえてみますと、一年生の教室は一番西側にあり、受持は安部傳先生で、ハナ。ハト。マメ。マス。ミノ。カサ。カラカサ。という言葉を書きながら勉強していました。高等科には消しながら勉強してました。高等科になりますと農業の科目があつて時々実習があり、学校の下（現在の県道の下）の農園を二坪位に区切ってそれぞれの受持を決め色々な野菜を作りましたが、ある時キャベツがたいへん良く出来て試食会をした事がなつかしく思い出されます。

昭和二年、私が補習科の生徒の時、校舎が老朽化したので新築する事になり、松巖寺の河原に大きなバラック小屋二棟を建て、そこでしばらく勉強したのも思い出の一つです。出来上つた校舎は総二階の立派なもので、当時は大野郡一といわれて自慢の学校でした。当時の校長先生は原田安馬先生です。

卒業して六十年の歳月が流れ、切れぎれと思ひ出すままを書きましたが、長谷尋常高等小学校で学んだ十年間は、私の人生の中で一番楽しい思い出となっています。

柴北川のそのほとりに高くそびゆるいらかには三百有余のはらからが睦みて学ぶ我が母校という校歌がありましたのを思い出します。